

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## カラスの親指

2012年・日本映画  
配給/20世紀フォックス映画、ファントム・フィルム・160分  
2012(平成24)年9月27日鑑賞 角川映画試写室

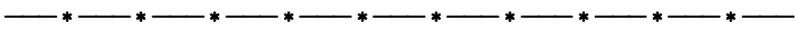
**Data**

監督・脚本：伊藤匡史  
 原作：道尾秀介『カラスの親指 by rule of CROW's thumb』（講談社文庫刊）  
 出演：阿部寛／村上ショージ／石原さとみ／能年玲奈／小柳友／鶴見辰吾／ベンガル／なだぎ武／古坂大魔王／戸次重幸／ユースケ・サンタマリア／上田耕一

### 👁️👁️ みどころ

中澤裕子が歌った『カラスの女房』は大ヒットしたが、『カラスの親指』とは一体ナニ？親指が男で、小指が女？いやいや・・・。

自分が詐欺の被害にあうのはイヤだが、スクリーン上に観る鮮やかな詐欺の手口は面白い。本作では奇妙な共同生活を営む5人の男女によるアルバトロス作戦が見モノだが、その成功によってハッピーエンドに・・・。いやいや、それでは「この映画の<秘密>を知っても、口外しないでください」とのうたい文句が泣くはずだ。



### ■□■まずは、鮮やかな詐欺の手口から！■□■

私は7、8年前の9月、北海道へのある「大名旅行」で生まれてはじめて競馬場に行き、馬券を買う体験をした。それから数年間毎年同時期にこの旅行が続き、その度に馬券を買っていたから、馬券の買い方、払い戻し方をしっかり理解することができた。しかし、本作の映画冒頭に登場するスーツ・ネクタイ姿のタケさんこと武沢竹夫（阿部寛）は、馬券の買い方も知らないらしい。そんなタケに親しそうに近づき、何やら怪しげなアドバイスをするのが映画初出演となったお笑い芸人・村上ショージ扮する入川鉄巳だ。テツのアドバイスに従って購入した馬券が当たったタケは大喜び(?)だが、



『カラスの親指』配給：20世紀フォックス映画／ファントム・フィルム 11/23(金)・初、全国ロードショー！  
 ◎道尾秀介・講談社/2012『カラスの親指』フィルムパートナーズ

テツのアドバイスを傍で観察していたユースケ・サンタマリア扮する男が払い戻し前のタケに怪しげなアドバイスを。そこでタケが社長から預かっている当たり馬券の払い戻しのために来ていることをしゃべると、彼はさらにしつこくタケに食いつき、さまざまな提案をしてきたが、さてこの冒頭のシークエンスの結末は？誰が誰を欺し、その結果、誰が得を？誰が損を？

かつて堀内孝雄が作曲し、モーニング娘。の中澤裕子がソロで歌った演歌の名曲に『カラスの女房』があったが、さて『カラスの親指』という本作の奇妙なタイトルの意味は？親指は男、小指は女。堀内孝雄の曲を聴くとそんなイメージが強いが、本作でテツが語る5本の指にまつわる寓話(?)は説得力十分！



『カラスの親指』 配給：20世紀フォックス映画/ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！ ◎道尾秀介・講談社/2012「カラスの親指」フィルムパートナーズ

## ■この2人はホモ？なぜ2人は同居を？■

字幕が流れる前の冒頭のシークエンスで、タケとテツがコンビを組んでいるプロの詐欺師(=カラス)であることがわかる。続いて、①ごく普通のサラリーマンだったタケが、なぜヤミ金業者で働くことになったのか、②タケの日常業務だった「わた抜き」(経済能力のなくなった客から、最後の1滴をしぼり取るハードな仕事)稼業によって、タケはある日ある母親を幼い子供を残したまま自殺に追いやったこと、③そのことにショックを受けたタケが雇い主であったヒグチ(鶴見辰吾)たちにどんな仕返しをしたのか、④その結果、タケはヒグチからどんな報復を受けたのか、というストーリーが展開していくから、タケが今プロの詐欺師として細々と(?) 生きていることに、なるほどと納得させられる。他

方、タケは今荒川のほとりに格安の一軒家を借りて住んでいるが、なぜテツがそこに転がり込み、2人が同居することになったのか、というストーリーも手際よくスクリーン上で説明されていく。これを観ていると、なるほどなるほどと納得できるものの、所詮「赤の他人」の中年男2人の同居生活はやっぱりヘン。ひょっとして、2人はホモ？さらに、2人ともプロの詐欺師だけに、この同居生活のどこまでが本場で、どこまでが詐欺・・・？



【カラスの親指】 配給：20世紀フォックス映画／ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！  
◎道尾秀介・講談社／2012「カラスの親指」フィルムパートナーズ

## ■□■若い姉妹プラス大男の3人は？5人の同居生活は？■□■



【カラスの親指】 配給：20世紀フォックス映画／ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！ ◎道尾秀介・講談社／2012「カラスの親指」フィルムパートナーズ

本作は第6回日本推理作家協会賞を受賞した道尾秀介の原作『カラスの親指 by rule of CROW's thumb』の映画化だが、1975年生まれ作家が創出した姉・河合やひろ（石原さとみ）、妹・河合まひろ（能年玲奈）の若者像は興味深い。タケとテツがまひろと知り合ったのは、まひろが鮮やかなスリのテクニックを見せたことがきっかけだが、幼くして2人だけで生きていくことを余儀なくされたまひろのたくましさを見ていると、「今ドキの若者は・・・」という批判が当てはまらないことがよくわかる。

もっとも、それはまひろだけで、姉のやひろやその恋人だという大柄の男・石屋貫太郎（小柳友）のニートぶりを見ていると、やっぱり「今ドキの若者はダメだ」と思えてくる。しかし、本作のクライマックスではこの2人も意外な能力を発揮するので、それに注目！

興味深いストーリー展開は、世間に背を向けて生きているはずのタケが、なぜか「アパートを放り出されるの」というまひろの話に耳を傾け、「うちに来ればいい」と助け船を出すこと。まさか2人の中年男でまひろのような若い女を「囲いモノ」にしようというのではないだろうから、タケの真意は一体どこに？こうして始まった奇妙な5人の共同生活のユニークさが本作の特徴だが、この奇妙に安定した（？）楽しい（？）共同生活はいつまで続くの？①高級車に乗った謎のチンピラ男の出現、②玄関前で不審火の発生、③トサカと名づけられた白い子猫の失踪（？）等々、先行き何やら不安だが・・・。



『カラスの観劇』 配給：20世紀フォックス映画/ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！  
◎道尾秀介・講談社/2012『カラスの観劇』フィルムアートズ



『カラスの観劇』 配給：20世紀フォックス映画/ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！  
◎道尾秀介・講談社/2012『カラスの観劇』フィルムアートズ

## ■□■アルバトロス作戦とは？5人のチームワークは？■□■

本作は5人の奇妙な共同生活を、少し「間延びでは・・・？」と思うくらい長々と描写していく。嫌がらせを受け続けている5人が一気に結束するのは、「私、もう我慢するのは嫌だよ」というやひろの言葉と、貫太郎が大切に保管している小箱からおもむろに取り出した拳銃のおかげ。とは言っても、それがニセモノであることがわかった途端その結束は崩壊したかに見えたが、そこでの「偽物で1本取るのは、お二人の得意技じゃないですか」との貫太郎の言葉は効果抜群だった。しかし、ここからテツが「アルバトロス（アホウドリ）作戦」と名づけたヒグチに対する一世一代の大勝負を決行することになるのだが、さてアルバトロス作戦とは？

アラン・ドロンが主演した『太陽がいっぱい』（60年）では、主人公が殺した親友になりきるため、親友と全く同じサインができるようになるため訓練に訓練を続ける姿が一つの見どころだった。しかし、アルバトロス作戦は5人がそれぞれの役割を分担するチームプレー詐欺だから、チームワークが何よりも大切。しかし、普段から集中、規律、団結などの言葉には程遠いニート姉やひろ、時計の修理はできてでも全く社交性のない貫太郎たちがホントにタケ、テツたちとチームワークを組んだ仕事ができるの？そんな冷やかし的な興味を持ちつつ、またさまざま計画実行における手違い（？）を楽しみつつ、カラスたちが見せる鮮やかな「手口」は、あなた自身の目でしっかりと。



『カラスの親指』 配給：20世紀フォックス映画／ファントム・フィルム  
11/23(金・祝)、全国ロードショー！！ ◎道尾秀介・講談社／2012『カラスの親指』フィルムパートナーズ

## ■□■ 作戦大成功！そこからが本作のミソ！ ■□■

アルバトロス作戦が成功した要因は、タケの企画立案能力の高さと5人のチームワークの良さだが、もう一つヒグチやその部下たちの凄みをきかすことには長けていてもあまり中味の良くない頭にある。欺す相手の頭の良し悪しをどこまで見込むかは、作戦立案の重要な判断要素。ところが、アルバトロス作戦の立案にあたってそれを十分考慮した形跡はないから、作戦成功にはラッキーな面も……。しかし、あくまで結果は結果だから、作戦が成功し、それを契機としてやひろ、まひろ、貫太郎の3人が新たな共同生活を決意。

さらにテツもタケからの「自立」を宣言するに至って、この物語は無事ハッピーエンド…？

一瞬そう思ったが、それでは本作は単純すぎるし、なぜ上映時間が2時間40分もあるの？そう考えた途端に始まるのが、ラスト約20分における怒涛の謎解きだ。「結末は明かさなideてください」と強調したのはM・ナイト・シャマラン監督の『シックス・センス』(99年)だが、それは決してM・ナイト・シャマラン監督の専売特許ではない。本作のプレスシートにも「この映画の<秘密>を知っても、口外しないでください」と書かれているから、当然私もそれに従わなければ……。作戦が成功した後が本作のミソ、ということ念頭において、それまでの2時間20分間に展開されるストーリーをすべて疑い、何が何の伏線になっているかを一つずつチェックしていくのも本作の楽しみ方の一つだろう。

2012(平成24)年10月1日記